しめ、正午には造船部を除く外全部の職工は退場を了したり。

其間九時半頃造船部職工は列を作りて第三回嘆願書提出の爲め孕石所長直接に會見を求め九時半過ぎ事務所に所長と面會し、既記同樣の要求條件を提出したるが所長は「工場委員制の實施其他は目下考究中であるから」と其他の條目に就いては逐條、會社の意のある所と時機尙早を說き會見三時間に亘り嘆願書は依然受付けられず交涉委員は「先づ工場に引上げたるが、爾餘の職工は其間構内に於て示威運動を繼續し、午後に到るも尙其行列に加はれるもの二千を算せり」一方、最も動搖せざりし電機工場にありても、內燃機、造船兩工場の形勢により同日も職工一部を歸宅せしむるの止むなきに到りたる折柄、川崎造船所職工七八百名の示威運動をなしつゝ通過するあり、加ふるに內燃機工、造船工と前後に示威運動の脅威を受け、同工場の職工も亦動搖して就業せず、拱手怠業の狀態なりしため、工場長は焦つて役付職工以上に訓示を與へたるも其効なく、玆に於て遂に再度役付以上の職工を召集し「同日は臨時休業とし、賃銀は一日分支給すべきも、若し翌日も同樣に就業せざることありたる場合には己むを得ず工場を閉鎖すべき」旨を申渡し、正午過ぎ全職工を退場せしめたり。尙三菱造船職工は示威行列解散後同夜兵庫郵便局隣り第二互助倶樂部に幹部會を開き、一方內燃機職工は午後六時より吉田新田青年會にて演說會を開きたり。

七、神戸勞働爭議團成る

三菱、川崎兩部の形勢は既記の如くなるが、同日は靑禪隊襲擊當夜の會合に依り完全なる兩部の合同策戰期に入れる兩爭議團は、此八日合同策戰に依つて進止し、既に其の然かるべきを豫想せる官憲及神戸市民に對して事實の上に事態の容易ならざるを確證したり。

兩者は先づ協定の如く大示威運動に入れり。先づ三菱內燃機及工作の職工約三千名は、午前八時同工場前の廣場に集合し、豫て用意の「三菱主機工組合」「造船鑄造工組合」「死ぬまで戰へ」等記したる大旗數十旒を揭げ、樂隊を先頭に川崎兵庫分工場を訪れ一度以前の廣場に引返し更に陣容を整へ川崎本社に向ひ內外呼應して万歲を唱へ、各新聞社を訪れ勞働歌を高唱しつゝ榮町一丁目を山手に縣廳前を經て、川崎本邸前を過ぎ大倉山に向ふ。一方朝來門外に集合して盛に氣勢をあげたる川崎兵庫分工場約三千名は午前十一時、數十流の大旗を押立て勞働歌を高唱しつゝ三菱工場に向ひ更に川崎本工場に到り造船、造機、仕上等の職工一万餘と共に万歲を絕叫し、同工場の正門より繰り込み工場內を通り拔け各新聞社、川崎本邸前を經て大倉山に向へり。

更に分工場職工を見送りし川崎造船工作部職工約三千は同じく大旗小旗數十旒を押立て、鑄鋼部職工の後を追ひ、同一の道順を以て大倉山に向ひ、殘れる職工數千は大旗數十旒をなびかせて會下山に向